

令和5年度ステイクホルダー調査結果に関するまとめ

看護職キャリア支援センター

令和5年度ステイクホルダー調査は、卒業生の活動実績を明らかにし、旭川医科大学医学部看護学科の教育研究活動の改善につなげる目的で、旭川医科大学病院に令和5年4月に配属された1年目看護師（令和4年度卒業生）が所属する部署の看護師長14名に対しアンケート調査を依頼した。そのうち11名から回答を得た（回収率78.6%）。活動実績の評価の回答は①思う②どちらかといえば思う③どちらかといえば思わない④思わないの4件法で求め、①②は肯定的回答群、③④は否定的回答群である。調査全体を通して厳しい評価を頂いた。ディプロマポリシーに則り作成した活動実績評価の質問項目に対する回答結果は以下の通りである。

ディプロマポリシー1 倫理観に基づいた社会的使命の遂行（姿勢・態度）

- ・「医療チームの一員として高度な生命倫理に基づいた誠実で良識ある看護実践を行う姿勢・態度を身に着けている」に対しては、肯定的回答群が72.7%、否定的回答群が27.3%であった。
- ・「社会に対して看護の使命を認識して実践する姿勢・態度を身に着けている」に対しては、肯定的回答群が63.6%、否定的回答群が36.4%であった。

ディプロマポリシー2 地域社会・国際社会へ貢献するための能力（意欲・関心）

- ・「地域から国際社会に至るまで保健・医療・福祉に関する社会的ニーズを踏まえ、看護の実践研究を通して課題を解決する意欲を有する」に関しては、肯定的回答群が18.2%、否定的回答群が81.8%であった。
- ・「看護の専門職として、たえず自己研鑽する意欲を有する」に関しては、肯定的回答群が36.4%、否定的回答群が63.6%であった。

ディプロマポリシー3 看護学と医療・保健・福祉の看護関連領域に関する十分な知識と生涯学習能力（知識）

- ・「幅広い教養を身に着け、看護の専門知識を習得している」に関しては、肯定的回答群が45.5%、否定的回答群が54.5%であった。

ディプロマポリシー4 問題解決能力、発展的思考能力、研究心（思考・判断）

- ・「研究的視点から看護に対する問題を発見し、その解決のための思考力・判断力を身に着けている」に関しては、肯定的回答群が9.1%、否定的回答群が90.9%であった。

ディプロマポリシー5 根拠に基づいた基礎的看護実践能力（技能・表現）

- ・「すべてのライフステージ・健康レベルに応じた、根拠に基づく基本的看護実践ができる技能及び表現力を身に着けている」に関しては、肯定的回答群が45.5%、否定的回答群が54.5%であった。

活動実績評価に関する回答では、「地域から国際社会に至るまで保健・医療・福祉に関する社会的ニーズを踏まえ、看護の実践研究を通して課題を解決する意欲を有する」「研究的視点から看護に対する問題を発見し、その解決のための思考力・判断力を身に付けている」に対する否定的回答群の割合が8～9割以上と最も高く、「看護の専門職として、たえず自己研鑽する意欲を有する」「幅広い教養を身に付け、看護の専門知識を習得している」「すべてのライフステージ・健康レベルに応じた、根拠に基づく基本的看護実践ができる技能及び表現力を身に付けている」に関しても否定的回答群の割合が5～6割以上を占めていた。

以上の結果から、次のような意見が出された。

- ・新人看護師は臨床現場ですぐに実践できるようになるための指導を望み、先輩看護師はそれに加え業務に関する指導が必要と考えており、新人看護師が求める教育ニーズと先輩看護師が求める教育ニーズにはギャップがあるのではないかと。
- ・ラダー評価でも研究に関する評価が低く、同様の結果が得られている。
- ・回答時に新人看護師の個人評価ではなく、自部署に配属された新人看護師をイメージしながら回答することを依頼したが、新人看護師の配属人数によっては個人評価になった可能性もある。
- ・回答者数が少ないため一人の回答の割合（％）が高くなり、結果に大きく影響した。
- ・ディプロマポリシーに則り作成した質問項目は抽象度が高く、何が課題なのかが不明確である。具体的な課題が明確になるよう、回答に記載項目を設けても良かったのではないかと。
- ・配属先の環境要因の把握も必要であり、記名式で回答を求めても良かったのではないかと。
- ・絶対評価だけではなく、他校の卒業生と比較して本学の教育はどのように見えるのかの相対評価も必要である。

次に、本学の看護教育に対して望むことについて調査した。回答は①改善強化を望む②改善を望む③現状で良いの3件法で求め、①②は改善希望群、③現状肯定群である。質問項目に対する回答結果は以下の通りである。

- ・「看護職としての姿勢・態度（社会人基礎力）の育成」に対しては、改善希望群が81.8%、現状肯定群が18.2%であった。
- ・「コミュニケーション能力の育成」に対しては、改善希望群が72.7%、現状肯定群が27.3%であった。
- ・「多職種連携を理解し、チームの一員として参加する姿勢の育成」に対しては、改善希望群が45.5%、現状肯定群が54.5%であった。
- ・「地域包括ケアにおける看護実践を遂行する力の育成」に対しては、改善希望群が36.4%、現状肯定群が63.6%であった。
- ・「国際社会における看護の役割について考える力の育成」に対しては、改善希望群が27.3%、現状肯定群が72.7%であった。
- ・「主体的に学習を進め、課題を抽出する力の育成」に対しては、改善希望群が81.8%、現状肯定群が18.2%であった。

- ・「自ら問題解決手法を見出す力の育成」に対しては、改善希望群が 72.7%、現状肯定群が 27.3%であった。
- ・「研究のプロセスにおける基礎知識の育成」に対しては、改善希望群が 45.5%、現状肯定群が 54.5%であった。
- ・「研究課題を自ら設定できる力の育成」に対しては、改善希望群が 36.4%、現状肯定群が 63.6%であった。
- ・「調べた情報を基に問題解決策を論理的に見出す力の育成」に対しては、改善希望群が 63.6%、現状肯定群が 36.4%であった。
- ・「看護学に関連した基本的な知識を習得し、実践できる力の育成」に対しては、改善希望群が 72.7%、現状肯定群が 27.3%であった。

本学の看護教育に対して望むことの回答では、「看護職としての姿勢・態度（社会人基礎力）の育成」「コミュニケーション能力の育成」「主体的に学習を進め、課題を抽出する力の育成」「自ら問題解決手法を見出す力の育成」「調べた情報を基に問題解決策を論理的に見出す力の育成」「看護学に関連した基本的な知識を習得し、実践できる力の育成」に対する改善希望群の割合が 6～8 割以上と高かった。一方、活動実績調査項目の「地域から国際社会に至るまで保健・医療・福祉に関する社会的ニーズを踏まえ、看護の実践研究を通して課題を解決する意欲を有する」の否定的回答群が 8 割以上を占めていたのに対し、本学の看護教育に対して望むことの質問項目の「地域包括ケアにおける看護実践を遂行する力の育成」「国際社会における看護の役割について考える力の育成」では、改善希望群の回答が 3～4 割未満にとどまった。また、活動実績調査項目の「研究的視点から看護に対する問題を発見し、その解決のための思考力・判断力を身に付けている」の否定的回答群が 9 割以上を占めていたのに対し、本学の看護教育に対して望むことの質問項目の「研究のプロセスにおける基礎知識の育成」「研究課題を自ら設定できる力の育成」では改善希望群の回答が 4～5 割未満にとどまり、実績評価と本学の看護教育に対して望むことの回答に乖離が見られた。

以上の結果から、次のような意見が出された。

- ・社会人基礎力、コミュニケーション力に関しては社会背景の影響もあり課題になるのが当然と思うが、教育の中でさらに強化していく必要がある。また、調査段階では新人看護師が入職して 1 年経過しているので、配属部署での取り組みも不足していたことが考えられる。
- ・回答結果はラダー評価の影響を受けていることが考えられる。「身に付けていないが改善も強く望まない」という結果は、ラダーの目標設定が「助言や指導を受けながら基本的な臨床実践ができる」となっていることが回答に影響した可能性がある。

以上

令和 6 年 7 月 17 日作成